

【東京オリンピック】 第19回

リオオリンピックが終わり、4年後の〈東京〉がめざされている。「メダルラッシュ」のなか、メダルを取ったばかりの選手がもう四年後を語っていることに注意したい。また、いまや、「東京オリンピックは中止した方がいい」と言うにはとてつもない勇気があるような〈空気〉ができていくことも意識しておきたい。

東京オリンピックを〈国民的経験〉ととらえ、〈国のかたち〉の実験とみて、冷静に分析することが必要と思われる。〈制度〉はその設計意図をこえて「暴走」する。それは制度が〈空気〉の上に乗っているからである。生活教育の観点からはそれを〈生活〉といつてもいいかもしれない。帝政を倒し、自由・平等・博愛をめざしたはずのフランス革命の諸制度が、十年たつてナポレオンの帝政を生んだのはなぜなのか、という問題意識である。オリンピックのあり方は教育制度や政策と密接に関係している。



東京オリンピックをめぐるのは、エンブレム、国立競技場の設計がやり直しとなり、東京都知事も交代した。お金がかかってもやりなおすべきはやりなおす、という〈新しい生活〉が見える。今後は、代わつていない森喜朗組織委員会会長に注目していきたい。

1964東京オリンピックの分析がまだまだ足りない。星新一が描いた「悪夢」は今も「有効」のようだし(①210頁)、渡辺華子のパラリンピックのとらえ方は、今につながる〈新しい生活〉を読み取っていた(①57頁)。また、高校進学率の急増を読み誤り、「抑制」した「失策」は、現在の教育を大きくゆがめる、生活に反した制度だったとも考えられる(大島宏・②170頁)。

(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ①石井正巳編『1964年の東京オリンピック「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか』河出書房新社、2014年。
- ②老川慶喜編著『東京オリンピックの社会経済史』日本経済評論社、2009年。